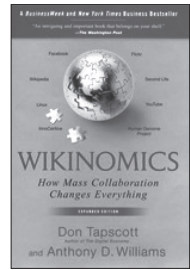


Wikinomics: How mass collaboration changes everything by Don Tapscott & Anthony D. Williams (2006, Portfolio)

知のマス・コラボレーションについて考える

Shikawa Haruhiko

北海学園大学教授 塩川 春彦



ネット上で誰もが自由に編集に参加できる百科事典であるウィキペディアについては、教育現場ではしばしば、否定的に語られる。米国の大学では、近年、ウィキペディアから「間違った引用」をして不合格になる課題レポートが多数ある、という。ウィキペディアからの引用を禁止している大学もある。

公に発表する文書や学生のレポートにおいて、ウィキペディアからの引用は、相当に慎重であるべき、あるいは避けたほうが無難、と私も考える。しかし、無数の人々が参加して百科事典を作り上げていくという営み自体は、私は、好意的に受けとめている。私がこのような考え方になったのは、タイトルに掲げた著作を読んだからである。(実際には、もう1冊 *The World is Flat: The globalized world in the twenty-first century (2007 version)* by Thomas L. Friedman (2007, Penguin Books) も大いに参考となった。)

Wikinomics では、英 *Nature* 誌電子版 vol.438 の記事を根拠に、ウィキペディアは、ブリタニカ百科事典と比べて規模は10倍、正確さは同等と主張している。英 *Nature* 誌電子版 vol.438 の記事については、『ウェブ進化論』（梅田持夫、ちくま新書）に紹介されている。『ウェブ進化論』によれば、*Nature* 誌の当該記事は、ウィキペディアとブリタニカの科学分野の項目の内容を調査・分析した結果として、ウィキペディアは喧伝されているよりも誤りは少ないし、ブリタニカにも同程度の誤りがある、と報告しているとのことである。

もちろん、無条件でウィキペディアを礼賛するほど、私は無邪気ではない。しかし、無料で「そこそこ」信頼性があれば、知りたいことがある

ときの、取っ掛かりとしては有用ではないか、と私は思っている。『ウェブ進化論』によれば、不適切な書き込みをチェックするボランティアが多数いるようだし、「誤りをわざと書き込んだら、きちんと修正されるか、修正されるのにどれくらいのかかるか」という実験も常に行われ、誤りがマス・コラボレーションによって正される自浄作用があるようだ。

最近、同僚の米国人教員が執筆した英語音声学テキストの記述の一部を日本語にする作業を手伝った。正確を期さなければならないので、辞書や専門書を必要とする仕事であった。この仕事の多くを、実は、帰省先や長期出張中のホテルでやってしまった。最終的なブーフ・リーディングは専門書にあたりながら慎重に行ったが、知りたいことを調べることは、ネット上で相当部分が解決してしまったからだ。「○○音と△△音の違い」というような検索語を google に入力すると、大学などで教えている専門家の授業ウェブサイトなどに行き着き、教えられた。ウィキペディアも参考になった。以前、私がビジネス関係の英語テキストを執筆したときも、専門知識を惜しげもなくネット上で披露している多数の専門家の善意に助けられた。

Wikinomics も、*The World is Flat* もビジネス書の範疇に入るので、“ビジネス競争に勝利する新しいモデルの提示”というトーンはある。ただ、「フラット化した世界におけるマス・コラボレーション」は、グローバル・レベルでの貧困の解消、民主化の促進、環境問題の解決といった、より良い世界の実現という方向にも貢献するのではないかと私は期待を抱いている（無邪気な奴と笑われるかもしれないが）。